

平和

2024

新宿区平和派遣事業

親と子の長崎レポート

新宿区





新宿区平和都市宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。
私たちは、世界で唯一の核被爆国民として、
自らも戦火を受けた都市の住民として、戦争の
惨禍を人々に訴えるとともに、永遠の平和を
築き、この緑の地球を、次の世代に引き継ぐ
責務がある。

国際平和年にあたり、私たちは、人類の
生存に深刻な脅威をもたらす、すべての国の
核兵器の廃絶を全世界に訴え、世界の恒久
平和の実現を心から希求し、ここに新宿区が、
平和都市であることを宣言する。

昭和六十一年三月十五日

新宿区

はじめに

新宿区は、すべての国の核兵器廃絶と世界の恒久平和を願って昭和 61（1986）年 3 月、平和都市宣言を行いました。それ以来、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えるために全庁をあげて平和啓発事業に取り組んでいます。そのひとつである「親子の平和派遣」は、被爆地である広島市と長崎市に区民の方を派遣し、現地で学んだ戦争の悲惨さと平和の尊さを地域に広く伝えていただく事業です。今回が 36 回目の派遣となり、区民の親子 7 組 14 名が令和 6 年 8 月 8 日から 10 日にかけて長崎市を訪れました。

昭和 20（1945）年 8 月 9 日、広島に次いで長崎に原子爆弾が投下されました。長崎の街は一瞬にして廃墟となり、7 万 4 千余人の方々が亡くなり、7 万 5 千余人の方々が負傷されました。

長崎に派遣された親子は、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列、長崎市立城山小学校の平和祈念式の見学、青少年ピースフォーラムへの参加、被爆体験講話の聴講や全国の小・中学生との意見交換を通じ、戦争の悲惨さと平和の尊さについて学びました。

この冊子は、派遣された親子一人ひとりが、派遣をとおして学んだことや考えたこと、これから先もずっと伝えていかなければならない「平和の大切さ」を、自分自身の言葉でまとめたものです。

この報告書をご覧になった方が、平和に関心を持ち、平和について考えていただくきっかけとなれば幸いです。

最後に、長崎市の訪問に際し、お世話になりました長崎市・公益財団法人長崎平和推進協会の皆様、青少年ピースボランティアの皆様、長崎市立城山小学校の先生・児童の皆様、派遣についてのアドバイスをくださった新宿区平和派遣の会の皆様、千羽鶴を折り派遣者に託してくださった児童館・子ども家庭支援センター利用者の皆様に心からお礼を申し上げます。

令和 7 年（2025 年） 3 月

新宿区総務部総務課



「長崎を最後の被爆地とする誓いの火」の
灯火台横にある新宿区の陶板（長崎市）



目次



第1部 親と子の長崎レポート

1	派遣者名簿	3
2	日程表	4
3	長崎で学んだこと、感じたこと	6
	①青少年ピースフォーラム（平和学習1日目）	6
	②青少年ピースフォーラム（平和学習2日目）	8
	③長崎原爆資料館	10
	④被爆体験講話	12
	⑤長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典	14
	⑥戦跡視察（浦上天主堂）	16
	⑦戦跡視察（被爆地周辺）	18
4	平和派遣に参加して	20
5	平和派遣報告会・平和祈念コンサート	34

第2部 資料

1	長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典	39
2	長崎平和宣言	40
3	平和への誓い	42

1 派遣者名簿



うざき じゆんべい
宇崎 純平

(愛日小学校 6年)

うざき ようこ
宇崎 陽子

えばと か の こ
江波戸 嘉乃子

(落合第一小学校 6年)

えばと けいこ
江波戸 景子

おぞの こうた
尾園 浩太

(富久小学校 6年)

おぞの ともひこ
尾園 智彦

たけだ な な
武田 菜々

(江戸川小学校 5年)

たけだ よしひろ
武田 義博

つかもと ながこ
塚本 暢子

(三輪田学園中学校 2年)

つかもと きょうこ
塚本 京子

なかむら ち さ
中村 智沙

(牛込仲之小学校 6年)

なかむら たかし
中村 崇

ふくしま えいき
福嶋 映貴

(筑波大学附属小学校 5年)

ふくしま くみこ
福嶋 久美子

2 日程表

● 事前説明会

令和6年7月22日(月)

派遣者の自己紹介と簡単なアイスブレイク後に、派遣に期待することを一人ずつ話しました。

その後、これまでの平和派遣に参加した方で構成される「新宿区平和派遣の会」から、派遣時のアドバイスをもらいました。

● 親と子の平和派遣

令和6年8月8日(木)～10日(土)

● 平和派遣報告会打合せ

令和6年8月19日(月)・9月10日(火)

派遣後、現地で学んだことを話し合いました。また、新宿区の代表として長崎を訪れた派遣者が、その成果を報告する「平和派遣報告会」の発表内容・構成、役割分担を決めました。

● 平和派遣報告会リハーサル

令和6年10月15日(火)

平和派遣報告会に向け派遣者が準備した発表内容を共有し、全体リハーサルを行いました。

● 平和派遣報告会・平和祈念コンサート

令和6年10月20日(日)

戸塚地域センターで開催

※ 新宿区平和派遣の会は、これまでの親と子の平和派遣事業の参加者で構成されている団体です。新宿区と協働で様々な平和啓発事業を推進しています。



新宿区平和派遣の会からのアドバイス
(平成12年度長崎派遣:中村和子さん(左))
(平成29年度広島派遣:小野栄子さん(中)敏子さん(右))



平和派遣報告会打合せ



平和派遣報告会での発表

令和6年度 親と子の長崎平和派遣 行程

8月8日 (木)	
7:20	集合 (羽田空港第2ターミナル)
8:25	羽田空港発
10:15	長崎空港着
10:45	長崎空港発 (空港連絡バス)
11:20	長崎新地ターミナル着
14:00	青少年ピースフォーラム【1日目】(平和会館ホール) ・開会行事 ・被爆体験講話 ・平和学習 (被爆の実相・戦時下の疑似体験ワーク) ・こどもまりフィールドワーク ◆希望する保護者は、被爆遺構めぐり ・原爆落下中心地、平和公園、浦上天主堂、永井隆記念館、山里小学校
17:30	長崎原爆資料館見学

8月9日 (金)	
7:15	ホテル発 (路面電車)
8:15	長崎市立城山小学校着 ・第876回平和祈念式見学 ・城山小学校平和祈念館 (被爆校舎) 見学
9:20	長崎市立城山小学校発
9:30	長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列 (平和公園) ※式典への出席は子どものみ、保護者は出島メッセ長崎で中継視聴
14:00	青少年ピースフォーラム【2日目】(出島メッセ長崎) ・平和学習 (班別意見交換 まとめ等) ◆希望する保護者は、被爆遺構めぐり ・長崎大学医学部、一本柱鳥居、山王神社、被爆クスノキ

8月10日 (土)	
10:00	ホテル発・自由行動 (市内の戦跡を自由に取材)
14:00	ココウォーク茂里町バスターミナル発
15:00	長崎空港着
16:15	長崎空港発
18:10	羽田空港着 解散

1

青少年ピースフォーラム
(平和学習1日目)

親：福嶋久美子 子：映貴

羽田から長崎に向かい、バスや路面電車を乗り継ぎ、青少年ピースフォーラムへ。子どもたちの表情は機内とは違うように感じた。戦争を知る覚悟と緊張ゆえだろう。翌日の平和祈念式典を控え、他自治体からの参加者と臨む平和学習は、派遣団にとって貴重な経験だった。



青少年ピースフォーラム会場にて

全国37自治体から376人の参加者が集い、青少年ピースフォーラムが開催された。進行は、長崎を中心とした青少年ピースボランティアが担ってくださった。

青少年ピースボランティアの案内による
フィールドワーク

まず、長崎市の鈴木市長が挨拶をされた。核兵器のない世界を長崎は願っていること、そして、次の世代につないでいてほしいということを力強くお話しされた。続いて、三人の青少年ピースボランティアが開会宣言をされた。

今回の目的は原爆や平和について学ぶことであり、平和な世界を作るにはどうしたらよいかを考える二日間にしてほしいとのお話。まさに、参加者が我がこととして考えてほしいことだ。そして、松尾幸子さんから当時十一才での被爆体験講話をいただいた。どれ

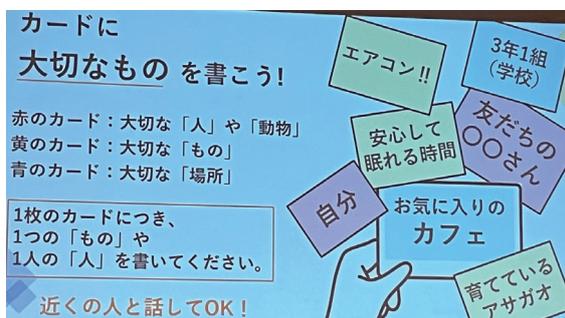
だけ恐ろしかったか、悲嘆に暮れたか。想像もつかない。参加した我が子が十才であることも考え、胸が塞がれた。

その後、被爆の実相を知る、戦時下の生活を疑似体験する、核兵器の現状を知るなどといったテーマに沿って、各参加者は被爆の現実を学んでいった。



戦時下の生活を疑似体験するプログラム

長崎の原爆では約 74,000 人が亡くなり約 75,000 人が負傷。爆撃機ファットマンの爆弾投下で、爆風、熱線、放射線による原爆症が人々を苦しめ、その後、根拠のない偏見や差別にも長い間苦しめられたという。亡くなられた方だけでなく、生存者も大切な人、もの、場所を失った。その無念さ、悔しさ、やりきれなさは、想像してもしきれない。



戦争の怖さを想像するためのプログラム

また、青少年ピースフォーラムでは、世界に存在する核兵器の数を音で体感するワークがあったり、日本は核兵器禁止条約に不参加

であることの説明を受けた。事実を他人事にしてはいけない。年齢や出身地が異なる参加者それぞれも、各自各様に気づきを得ながら、自分なりの学びと考えを得ているのを強く感じた。



「平和の祈りキッズゲルニカ in ながさき」

自分が知らなかった事実と被害者の辛い記憶。本や歴史の授業だけでは感じにくいけれど、全て現実にあったことだ。我が身に置き換えると、大人の自分でも身がすくむ。実際には、すくむ時間もなかったのかもしれない。それは 79 年経ったとはいえ、近い時代に起きた決して忘れてはいけないこと。

私たちは平和を求める気持ちを永遠に受け継いでいかなければならない。その気持ちを改めて持つことのできた青少年ピースフォーラムだった。



青少年ピースフォーラム 1 日目が行われた
長崎市平和会館前で

2

青少年ピースフォーラム (平和学習2日目)

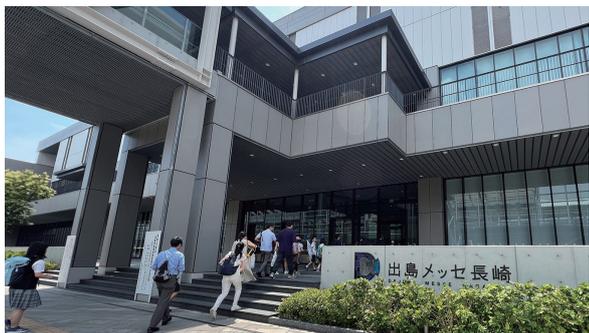


親：中村崇 子：智沙

青少年ピースフォーラムについて

8月8日、9日の二日間にわたり開催された令和6年・青少年ピースフォーラムに参加しました。ここでは、9日（2日目）の参加報告をします。場所はJR長崎駅から直結の出島メッセ長崎にて行われました。

青少年ピースフォーラムは、長崎の青少年ピースボランティアの高校生・大学生が企画と進行を行う参加型平和学習イベントです。参加者は私たち新宿区を含む全国37自治体から派遣された子供たちで、全376人が参加した大きな交流イベントでした。

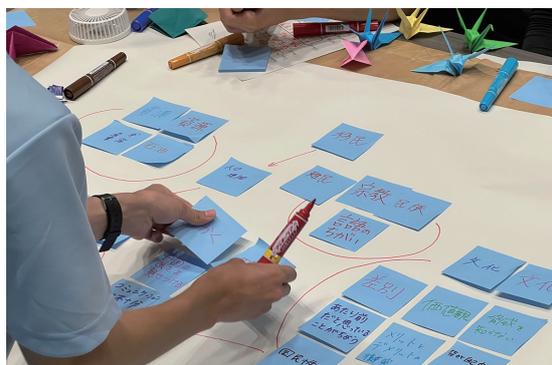


出島メッセに向かう派遣者
(青少年ピースフォーラム2日目の会場)

ワークショップから「My 平和宣言」まで

出島メッセのコンベンションホールにて、多くの青少年ピースボランティアと子供たち

のエネルギーに包まれる中、ワークショップが始まりました。子どもたちは全31班に分けられ、各班ボランティアが3人程度、派遣の子供が約10人の構成にてワークショップが行われました。



ワークショップの様子

題目はつぎのとおりでした。

- ①うそつき自己紹介（15分）
- ②ケンカ、戦争はなぜ起きるのか（15分）
- ③ケンカ、戦争をなくすために、どうしたらよいか考えよう（20分）
- ④My 平和宣言、私にできること（10分）

①は参加者の子供たちの緊張をほぐす自己紹介の時間でした。②と③がワークショップで、経営学や会社の新人研修などビジネスの

長崎で学んだこと、感じたこと

場で用いられる（大人が用いる）ブレインストーミング・KJ法の思考ツールを用い、子供たちが平和について考え学習することに挑戦しました。それらをまとめ④で子供たち一人一人が「My 平和宣言」として平和のための行動方針を考え発表しました。



「My 平和宣言」を考える様子

最後に、青少年ピースボランテアから、2日間で学んだことを覚えておいてほしい、学んだことを家族や周りの人に伝えて欲しい、という二つの言葉が派遣の子供たちに送られました。

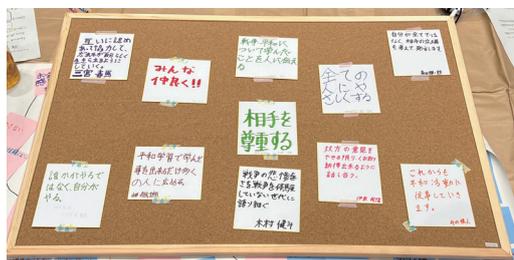


全国の参加者と青少年ピースボランテアとの意見交換

子供たちのメッセージと期待

青少年ピースフォーラムの1日目では戦争・原爆についての学び（インプット）、2日目

はその学びからどう考え行動するか（アウトプット）を決める機会だったと私は思いました。色紙にかかれたMy 平和宣言の中で印象深かったのは「幸せを感じて生きる」という言葉でした。私の小学生の娘にはKJ法のワークショップは少し難しかったかもしれませんが、最後に「みんな仲良く!!」というMy 平和宣言をすることが出来ました。



みんなの「My 平和宣言」

娘は「以前より戦争のことがよく分かった」ということで、本フォーラムに参加できたことは戦争・原爆のことを深く考えていく起点になったと思います。

最後にもう一つ印象深かったのは青少年ピースボランテアの頑張りです。感銘を受け、私ももっと次世代の子供たちのために行動しよう、と気づく一日でした。子供たち青年たちの力は期待できると感じました。



青少年ピースフォーラム2日間を終え派遣者全員で

3

長崎原爆資料館



親：武田義博 子：菜々

長崎原爆資料館への訪問は、今回の平和派遣の中でも特に心に残る体験でした。訪問前に、原子爆弾の開発者であるオッペンハイマーに焦点を当てた映画を観ました。その映画では、広島や長崎の惨状は描かれず、彼の苦悩や葛藤、そして善悪の揺らぎが表現されています。加害者としての相手国や科学者の視点から見ることで、長崎訪問前に異なる視点を持つことができました。

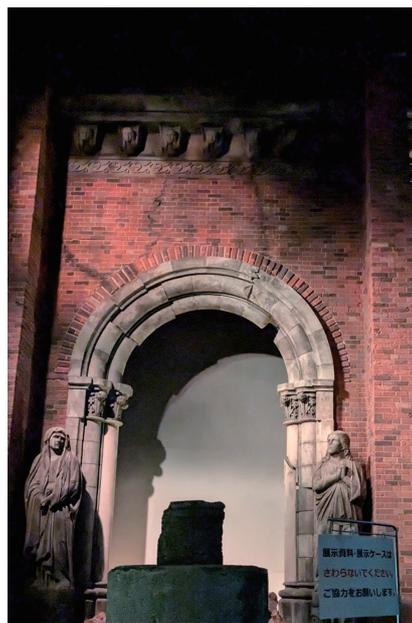
複雑な感情を抱きながら館内に入ると、円形の大きならせん状のスロープを降り、時の流れを遡るように展示室に進みました。荘厳な千羽鶴の花のアートに目を奪われ、11時02分で止まった柱時計の無機質な数字が胸を締め付けました。



長崎原爆資料館のらせん状のスロープ

最初に目に飛び込んできた「長崎を最後の

被爆地に」というメッセージは、二度と同じ過ちを繰り返さないという強い決意を感じさせるものでした。



被爆した浦上天主教堂（再現造型）

館内には、原爆で崩壊した浦上天主教堂の一部の再現や、爆心地近くの写真、街の立体模型に投影された原爆被害の映像など、視覚的に当時の惨状を伝える展示が数多くありました。破壊の恐ろしさが圧倒的に迫ってくる中、特に印象に残ったのは、原爆「ファットマン」の実物大の模型でした。

長崎で学んだこと、感じたこと



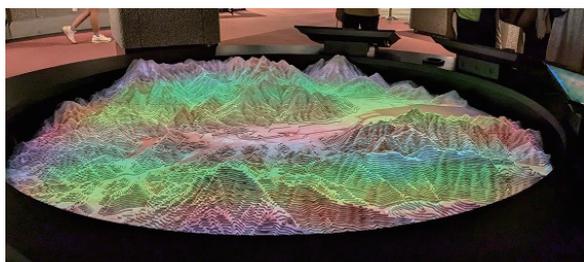
長崎型原爆「ファットマン」の実物大模型

長崎への原爆投下に至る経緯が詳細に説明され、その一発がもたらした甚大な被害が浮かび上がりました。被爆者たちの苦しみと、オープンハイマーの葛藤が交錯するように感じられました。中でも、子どもや親子の悲惨な姿が強く心に残りました。かつての家族の笑顔を想像すると、居たたまれない気持ちで目を伏せざるを得ませんでした。しかし、娘が恐怖を感じながらも真っ直ぐ展示物を見つめる姿を見て、平凡な日常の大切さを改めて実感しました。それこそが平和の一步だと強く感じました。



原爆による人々の被害の状況

戦争を過去の出来事と感じる世代が増え、被爆者も減少しています。一方、国際情勢は緊迫し、核兵器使用の可能性が現実味を帯びています。長崎原爆資料館では被爆80周年を機に展示が見直され、平和のメッセージを次世代に伝える努力が続けられています。私は再びこの場を訪れることを心に誓いました。



被害の状況を伝える長崎市街の地形模型

今回の平和派遣を通じて、亡き母、私自身、そして10歳の娘という三世代の視点から戦争と平和について深く考える機会を得ました。母が広島で経験した「黒い雨」の悲劇を、どのように次世代に伝えていくべきかを改めて考えることができました。

特に、資料館の展示を通して、未来の世代に何を伝え、どのように生きるべきかを深く問いかけられました。

最後に、平凡な日常こそが平和の基盤であることを、心から実感しました。原爆の後遺症に苦しみながらも懸命に生き、私を育ててくれた母への感謝の思いが胸に込み上げます。今、娘と共に過ごすこの穏やかな日々が、どれほど尊くかけがえのないものであるか。そして、この日常を守り、平和の大切さを次の世代に伝えていくことこそ、私たちの使命だと強く感じました。母の想いを受け継ぎ、娘の未来に平和を手渡していく決意を新たにしています。

4

被爆体験講話
(講師 松尾幸子さん)



親：塚本京子 子：暢子

現在 90 歳になられる松尾幸子さんは、被爆当時 11 歳で、山里国民学校（現在の山里小学校。爆心地の北東約 0.6km）に通う、5 年生の少女でした。ご自宅は大橋町（爆心地の北約 0.7km）で、農業と馬車で荷車を引く運送業を営んでおり、祖母・両親、兄弟姉妹、未婚の叔母二人、住み込みの従業員を含めて、20 人の大所帯で暮らしていました。

1945（昭和 20）年 8 月 9 日午前 11 時 2 分。原爆が投下されたその時、幸子さんは、ご自宅の西にそびえる岩屋山のふもとに、お父様が、急ごしらえで建てた仮小屋で過ごしていました。米軍が、空からまいたとされる「8 月 8 日、長崎は灰の街」と書かれたビラの内容を信じたお父様が、さつまいも畑のある岩屋山に、畳 2 枚・材木・トタンを運び、仮小屋を造って下さったそうです。



外出する時の持ち物

ビラに書かれていた 8 月 8 日は、何事もなく過ぎました。しかしお父様は 9 日の朝「アメリカは 1 日遅れだから、今日が 8 月 8 日になる。今日までは絶対山に行くように」と強く主張され、幸子さんと祖母、母、幼い弟妹たちは、翌日も岩屋山の仮小屋に出かけたのでした。



爆心地周辺図

とても暑い日で、幸子さんが下着姿になって、小屋の中で過ごしていたところ、突然、白いような黄色いようなピカーっという光が目に入り、次の瞬間ドーンという、ものすごい音が聞こえて、あたりが真っ暗になりました。

気が付くと幸子さんは、はだしで小屋の外に立っており、仮小屋が燃え始めているのを

長崎で学んだこと、感じたこと

目にしました。お母様は左目あたりを、1年生の弟さんは背中に、大きな怪我を負い、親戚の少女たちは、肩や指先にやけどを負っています。あまりの惨状に、お祖母様が「爆弾は、ここに落ちたのか」と、つぶやかれたほどでした。はるかに見える浦上天主堂までもが、崩れ燃え落ちていく様子を、幸子さんとお祖母様は、涙を流して見つめました。「私たちの教会が燃えている」と。原子爆弾という新型爆弾が、仮小屋から1.3km余り離れた松山町に投下されたことを、この時の幸子さんたちは、知るよしもありません。

お父様は、9日午前8時前に発令された空襲警報に対応するため、警護団の事務所2階に詰めており、爆心地から約0.8kmの場所で被爆されました。その日のうちに、自力で仮小屋までたどり着かれたそうですが、頭から足先まで怪我を負われた状態でした。

お父様は終戦後も、罹災証明書を発行するなど、警護団の仕事が続けていらしたそうですが、次第に体中に皮下出血の斑紋が出て高熱が続き、被爆から19日目の8月28日、避難先の時津で苦しみながら亡くなりました。一番年上のお姉様が、ご自宅で爆死されたことを知った時には感じなかった悲しみの感情が、お父様の死を目にした時、幸子さんの胸に初めて一気に湧き上がったそうです。



被爆直後の山里国民学校（爆心地より約0.6km）

お兄様の奥様は、親戚宅で爆死され、そのご主人であるお兄様は、山里国民学校の屋上で「敵機」と周囲に知らせた直後に、熱線を浴びて亡くされました。ご遺体は、ご家族が駆けつける前に片付けられ、今なお行方知れずとの事です。また亡くなられたお姉様と同じく、ご自宅で被爆された叔母様は、顔も分からないほどの大やけどを負われ「何で、こんなに苦しんで死ななければならないの」という悲痛な叫びを残して亡くなられたそうです。



松尾幸子さんの講話を聴く全国の参加者

幸子さんは、おっしゃいます。「もう戦争はしたくない。核はなくして下さい」と。

これは幸子さんのみならず、被爆された方々から、私たち若年の世代が託された、大きな課題です。核兵器を使用しないこと、兵器が使用される前提となる戦争や紛争を、いかなる理由があっても決して是としないこと。戦争を体験された世代の方から、私たちの世代が託されたこの大きな課題は、簡単に解決出来るものではありません。しかし幸子さんの講話をお聞きして、この課題に生涯向き合うこと、そして次の世代に引き継ぐべきことを、強く心に刻みつけたいと思います。

5

長崎原爆犠牲者慰霊 平和祈念式典



親：尾園智彦 子：浩太

8月9日朝、城山国民学校（現：長崎市立城山小学校）の見学を終えた私たちは、保護者チームと子どもチームに分かれ、子どもたちは平和祈念式典に参列するため会場の平和公園へと向かった。

79年前の朝も、今日のような青空が広がっていたのだろうか。あの日に思いを馳せながら、子どもたちの背中を見送った。

引率してくださる区職員の両手には、新宿区の子どもたちが児童館で折った千羽鶴が何束も抱えられている。



式典会場の平和公園に献鶴した千羽鶴

午前10時45分から約1時間、平和祈念像前で式典が開催された。

主な式次第と所感は以下のとおりである。

原爆死没者名奉安

この一年間に新たに亡くなった3,200人のお名前が記載された死没者名簿が納められた。累計198,785人のお名前が奉安されたことになり、このペースでいくと来年は20万人の大台に達するだろう。原爆体験者が年々少なくなっていく中、犠牲者の労苦が風化しないように、我々が次の世代にしっかりと想いを引き継がなければならない。



式典の様子

献花

例年と比較すると、各国駐日代表の参加が極端に減少した。報道によると、招待国の1/3以上が参加辞退したとのことで、紛争中のイスラエルを招待しないという長崎市の判断の影響は顕著だった。当該判断の是非や外交的な問題について意見する立場にはないが、少なくとも世界が平和のために集うはずの機会が、逆に各国間に遺恨を生むきっかけとなったのは皮肉で悲しい。



内閣総理大臣による献花

黙とう

11時2分、1分間の黙とうが捧げられた。本来であれば会場にいる全員が目を閉じ、犠牲者の御霊を慰霊すべきであるが、政治リーダーを標的とする銃撃事件が国内外で相次ぐ中、この1分間さえも目を見開いて警備にあたった人たちがいただろう。銃は核兵器と同じく、憂慮すべき問題である。

長崎平和宣言

長崎市長が全世界に向けて平和宣言をおこなった。「世界の若い世代が連携し、行動する輪が各地で広がっています。平和な未来を築くための希望の光です。」と笑みがこぼれる

一方で、日本政府に対しては、「一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。」と、険しい表情で核廃絶に向けたリーダーシップを求める姿は力強く、印象的だった。

来賓挨拶

内閣総理大臣、国連事務総長、長崎県知事が挨拶をおこなった。岸田総理大臣は、「『核兵器のない世界』の実現に向け、現実的かつ実践的な取組を着実に進めることこそが唯一の戦争被爆国である我が国の使命だ」と述べた。

この挨拶から5日後に総裁選への不出馬を表明した岸田総理大臣。リーダーシップは果たして誰の手に委ねられるのだろうか。



式典会場の様子



式典に参列する子どもたち

6

戦跡視察(浦上天主堂)



親：宇崎陽子 子：純平

「日曜日になると、その道は、たくさんの家族づれでにぎやかになりました。浦上天主堂へ、ミサに行くためです。浦上天主堂は、金毘羅山のふもとにありました。赤いレンガづくりで、二つの鐘楼をもつ、美しい聖堂でした。」(『娘よ、ここが長崎です』筒井茅乃)

戦禍中も神への祈りを欠かさずこの道を通い続けた人々へ思いをはせながら坂道を上っていくと、雲一つない紺碧の空にコントラスト鮮やかに赤レンガの浦上天主堂が私たちを出迎えてくれました。



浦上天主堂前で

教会の中は、真夏の眩しすぎる日の光がス

テンドグラスによって柔らかい光へと変化し、優しく降り注ぐ光の中で私たちは平和への祈りを捧げることができました。

長崎の歴史はキリスト教との結びつきを抜きに語ることはできません。1567年にキリスト教が伝来すると長崎は日本におけるキリスト教の中心地となりましたが、江戸時代の250年以上におよぶ禁教期間には長く厳しい弾圧の舞台ともなりました。禁教の解かれた1873年、密かに信仰を守り続けた潜伏信徒たちが浦上地区に戻り、赤レンガを1枚1枚積み上げながら30年の歳月をかけて造り上げた教会が浦上天主堂です。当時の浦上天主堂は、ロマネスク様式で「東洋一の大聖堂」と謳われ、浦上地区には12,000人の信者が信仰とともに暮らしていました。

1945年8月9日、爆心地から500mに位置していた浦上天主堂は、爆風により全壊しました。高さ26mの双塔に備えられていた50tもの鐘楼は北東の川に転げ落ち、正面祭壇に安置されていた高さ2mのマリア像も吹き飛ばされました。そして、浦上地区の信徒

長崎で学んだこと、感じたこと

12,000人のうち8,500人が一瞬にして命を落とされました。

戦後、浦上天主堂は再建されましたが、ここには原爆の恐ろしさを感じさせられるものが遺されています。塔の上から転げ落ちて川を塞いだ鐘楼は、当時のままその場所に半分地中に埋まった状態で遺されています。鉄筋コンクリート製で直径5.5mの鐘楼は間近で見るとよりその大きさが分かり、これほど大きく重い鐘楼を吹き飛ばした爆風の威力を想像すると言葉をなくします。



落下した鐘楼（鉄筋コンクリート製 推計約50t）

丘の上から街を見守るように立つ3体の聖人像は、どれも熱線で黒く焼け焦げ、体や頭部を欠いています。石造でさえこのような痛ましい姿に変わり果ててしまうのです。聖人像はそのままの姿で原爆の恐ろしさを静かに伝え続けています。

吹き飛ばされたマリア像は、瓦礫の下から奇跡的に頭部だけ発見されましたが、髪や頬は黒く焼け、目は空洞となった無残な姿でした。傷ついた「被爆マリア」は、原爆投下国のアメリカをはじめ世界各国を渡り、その身をもって今も原爆の脅威を訴え続けています。



保存されている旧浦上天主堂の遺構

戦後、浦上天主堂を広島「原爆ドーム」のように原爆遺構として遺す議論が持ち上がりましたが、結果として再建の道をたどることになったそうです。全壊した浦上天主堂がそのまま遺されていれば、原爆の脅威と悲劇を世界へ伝える最たる象徴になったであろうという意見もありますが、現在遺されているいくつかの遺構を前にしたとき、私はそれだけで原爆の恐ろしさを十分に肌で感じました。



落下した鐘楼の前で

同時に、焼け野原となった土地から見事に再建された浦上天主堂を見上げると、耐え難い深い悲しみと苦難を乗り越えて平和の礎を築き上げてこられた方々のたくましさ大きな祈りに包みこまれるような感覚を覚え、「長崎を最後の被爆地に」という強い気持ちを新たにしました。